



つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 124号 2010.8.18 発行 社会政策研究所

各地で様々な支援ノート作りが取り組まれています。成年後見制度にかかわるもの(東京都大田区)、ライフプラン(日本ライフプランナーズ協会)、生活支援ノート(東京都知的障害者育成会)、療育支援ノート(山形県)、遺言に絡めた意思ノート(SSS ネットワーク)など、最新の情報をお伝えします。

なお、詳細はそれぞれのサイトをご覧ください。【kobi】

知的障害者のある方の成年後見制度の活用に向けて～「知的障害者のある方・ご家族のための成年後見制度等活用モデル事業」報告書～ 2008年3月

【発行者】 社会福祉法人 大田区社会福祉協議会 社会福祉法人 東京都社会福祉協議会

【目次】

はじめに

第1章モデル事業の概要

1 モデル事業のねらい

(1)成年後見制度の利用状況 (2)成年後見制度の利用が進まない背景

2 モデル事業の基本的な視点

3 モデル事業のあらまし

第2章知的障害のある方の成年後見制度利用上の課題

1 提起された課題について

(1)成年後見制度のあり方に関すること (2)家族と成年後見人等との連携に関すること (3)相談窓口のあり方に関すること

2 課題の解決に向けて

第3章成年後見活用モデルの検討とモデルケースへの取組みから

1 モデルケースへの取組みにあたって

(1)モデルケースへの取組みのねらいと経緯 (2)成年後見活用モデル(試案)の検討

本人による任意後見制度の活用について 親による任意後見制度の活用について 準委任契約の活用について 法定後見について

「知的障害のある方のための成年後見活用モデル表(試案)」

A 第三者後見人活用型

B 親から第三者への移行型

C 親と第三者の複数後見活用型

(3)モデルケースへの取組みから見えてきたもの

【事例1】専門職が後見人になるケース(複合的なニーズがある場合)

【事例2】親が後見人になるケース(大きな困難要因がない場合)

【事例3】将来に備えるケース(将来の見通しが流動的な場合)

第4章将来に向けたライフプランノート

1 ライフプランノートのコンセプト

(1)当事者と支援者との「かけはし」として (2)簡易な情報管理ツールとして

2 ライフプランノートの内容

(1)ライフプランノートの構成 (2)本人に関する基本的な情報の記録 (3)家庭での様子などに関する記録

(4)家族が考えている準備に関する記録 (5)「質問シート」、「連絡・相談用シート」

3 ライフプランノートの活用方法

(1)ライフプランノートを活用するための前提 (2)家庭におけるライフプランノートの活用方法 (3)支援機関におけるライフプランノートの活用方法 (4)第三者後見人におけるライフプランノートの活用方法

第5章今後に向けての課題

1 地域における支援ネットワークのあり方

(1)成年後見制度をより身近なものにするために (2)社会福祉協議会と福祉施設や当事者団体との「役割分担」 (3)関係機関や団体とのネットワークの構築 (4)専門職との連携と協働

2 成年後見制度の情報提供のあり方

(1)成年後見制度の情報発信 (2)利用者にあわせた情報提供の工夫

3 相談体制について

(1)利用につながる相談体制 (2)気軽に相談できる体制づくり

4 後見人候補者の確保と後見人への支援

(1)信頼できる後見人候補者の確保 (2)後見人へのサポート (3)第三者後見人の紹介とマッチング (4)後見人候補者の養成 (5)後見人のネットワーク作り(後見人連絡会)

5 社会福祉協議会が取り組むべきこと

(1)地域の見守り体制の充実 (2)福祉施設、当事者団体、関係機関等との連携 (3)たなしくみづくりへのチャレンジ

資料編

<http://www.tvac.or.jp/libes/each.cgi?id=26563>

新しい自分を発見し、未来を創ろう 日本ライフプランナーズ協会

ライフプランノート 資料集

今までのライフプラン

「耳の細いウサギ」ライフプラン原図

人には年をとるごとに、それぞれのライフステージがある。

あなた自身のライフプランを設計するために

・祝未計画 ・誕生から現在まで ・My Resources

・JOB CONCEPT ・自己発見チェックリスト

ライフプラン・指標

・家族・暮らし ・経済的蓄え ・健康 ・

友人・交友

・生きがい・趣味ほか

・48年計画 ・24年計画

・12年計画 ・6年計画

・3年計画 ・今年の計画

<http://www.trends.jp/life/data.htm>

東京生活支援ノート 東京都知的障害者育成会

「東京生活支援ノート～つなぐ～」について

このノートは、障害のある人が生涯にわたって、安全で安心した生活を送れるように、ライフサイクルを通じての健康や生活の様子を記録し、必要な時に必要な情報を役立てていただけるように作成したものです。

医療にかかる時、福祉の窓口で相談する時、今までのことを何回も尋ねられて、困った経験をお持ちの方も多いと思います。そんなときにこのノ



ートを見せて伝えることができると便利だと考えて作りました。

成長の過程で、いろいろな問題にぶつかるかもしれませんが、一人で抱え込まないで、相談できるとよいと思います。そんな時にもこのノートが役に立つとよいと思います。

子どもが小さいころは、成長の喜びに目を見張るとき、幸せな気持ちになった時などに忘れないように書いておくと、成長の記録にもなると思います。

* このノートは本人が支援を必要とする時に使用するためのものです。

* 本人のプライバシーの保護には十分に注意を払ってください。

<http://www.ikuseikai-tky.or.jp/oya/news/note/note.html>

山形県庄内保健所管内療育支援ノート(かんがるうのーと)について

庄内保健所管内療育支援ノート(かんがるうのーと)とは？

管内の保健、医療、教育等の関係機関が有する情報の記入が可能なノートを発行し、正確な情報をそれぞれの関係機関が共有することによって、長期療養が必要な小児と保護者に対する一貫した支援に供することを目的としています。

発行者は？

原則庄内保健所とし、市町、医療機関で発行する場合は、事前に連絡を受けた保健所職員が出向いて交付します。

発行対象は？

小児が、複数の関係機関から治療を受けており、「かんがるうのーと発行についての同意書」を提出した保護者を対象としています。

療育支援ノート(かんがるうのーと)の記入者は？

ノートの記入は、原則として保護者が行います。書き方や使い方などでわからないことがありましたら、保健所にお問い合わせください。

<http://www.pref.yamagata.jp/ou/sogoshicho/shonai/337027/ryoikusien-note.html>

最期の準備 『意思ノート』や交流ネットワーク

中日新聞 2010年8月18日

「最期」の準備に利用できる各種「ノート」



「みんな最期のことが不安なので、共同墓を造ったら安心した」

シングル女性の老後をサポートするNPO法人「SSSネットワーク」(東京都目黒区)の松原惇子代表はこう話す。共同墓は二〇〇〇年に造られた。希望会員が死後に入る。いわばグループホーム型の墓だ。

東京都内の民間霊園にある共同墓の永代使用料は二十五万円。現在十八人が埋葬されている。会員約千人中、約三百人が利用を申し込んでいる。

シングルだと、親族に死後の面倒をみてもらうのは難しい。松原代表は「死んだとき、墓なのか、散骨なのか、どうするかは決めておく必要がある」と言う。どのように最期を迎え、どんな葬送を望むのか、事前準備が大切になる。

そのためには自身の希望や考えを見つめ直す作業が必要だ。その情報収集のためには「人のつながりしかない。お互いの経験を生かせるし、交流で楽しくもなる」とネットワークの大切さを強調する。非婚や離婚、離別などでシングルの人が増える現代、こうしたネットワークづくりが各地で始まっている。

家族がいても、親族との縁も遠くなり、葬儀や墓など最期の準備について戸惑う。自身で準備を進めるために注目されているのが、自ら希望や意思を記入し終末期の対応をまとめる「エンディングノート」や、急病など万が一にも備える意思ノート類だ。

自身の健康状態や経済状況、緊急時の連絡先、交友関係、延命治療の有無、葬儀や墓についての希望、ペットの世話、連絡してほしい人とそうでない人のリストなどを、項目別

に書き記す。
本人の希望に合った葬儀を企画するNPO法人「ライフ・アンド・エンディングセンター(LEC)」(さいたま市中央区)は「もしもノート」を発行する。「ノート」は「意思」に添わない葬儀などを防ぐことが目的だが、須齋(すさい)美智子理事長は「書くことで何が準備できていないか確認できる。自分の人生を振り返り、自分らしく生きることにもつながる」と話す。

「ノート」を書いても家族が存在を知らなければ、役に立たない。一人暮らしの場合は、目につく場所に置き、知人にも話しておくことが大切だ。

「新・遺言ノート」(KKベストセラーズ刊)の著者で、納骨など死後の手続き代行も行うNPO法人「エンディングセンター」(東京都町田市)代表の井上治代さんは「ある程度書いたら、家族で話題にしたほうがいい。関係を深められるし、家族が本人の意思を尊重しようという気持ちになる」と話す。加えて「子ども同士でも考え方が違うから、本人の意思が残されていると迷わないで済む」と言う。

井上さんは「ノートを作るには、葬儀や墓など現状を学習することが大切」と学習会や霊園の見学などを勧める。

「いざときノート」を発行する前出のSSSネットワークの松原さんも「行動すれば、いろいろ出会うし、思わぬ発見もある」と行動を促す。

須齋さんはこう呼び掛ける。「自分の足元を見つめることが、終末期の最大の準備になる」

SSSネットワーク=電03(3794)9630 LEC=電048(856)5673 エンディングセンター=電042(850)1212。(飯田克志)

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行